サッカーと和歌山の意外な関係

日本サッカー協会のシンボルは熊野の神鳥「ヤタガラス」？

日本サッカー協会のシンボルマークに描かれている、ボールに足をかける三本足のカラス。中国の伝承によると、三本足のカラスは日の神（＝太陽）の象徴といわれ、日本においては「太陽の化身」とも「導きの鳥」ともいわれている。また、神武天皇御東征に際し、天皇の軍隊を熊野国（和歌山県南部）から大和国（奈良県）へと道案内し勝利に導いたのも「八咫烏（ヤタガラス）」と呼ばれる三本足のカラスとされている。熊野三山（熊野本宮大社・熊野那智大社・熊野速玉大社）ではそんな八咫烏を「神々の使い」とし、信仰の対象となっている。

八咫烏とシンボルマークとの関連性は明確ではないが、近代サッカーの普及に貢献した那智勝浦町出身の「中村覚之助」に敬意を表し図案化されたともいわれている。

「熊野那智大社（那智勝浦町）」境内にある八咫烏。太陽を見つめる精悍な面差しは日本サッカーを勝利へと導く。

1904（明治37）年2月6日、日本初の外国人チームとの対外試合の記念写真。

熊野三山でのW杯必勝祈願の旗

日本サッカーの始祖 中村覚之助

日本に初めてサッカーが紹介されたのは1873年。イギリス海軍将校たちが日本の海軍軍人に、訓練の余暇として伝えたのが最初だといわれている。その後の1878年、熊野三山のひとつ熊野那智大社が鎮座する現在の那智勝浦町に、日本サッカーの礎を築いたといわれる中村覚之助が生まれる。

覚之助は当時の東京高等師範学校（現筑波大学）に進学、在籍中の1902年に「アッソシエーション・フットボール」という英語の本を翻訳し、同校の〝ア式蹴球部〟の創設に尽力した。そして、そのア式蹴球部が横浜で外国人チームと試合を行う。これが日本で最初の対外試合といわれている。

この試合の様子が新聞で報道され、全国からサッカー指導の依頼が殺到、蹴球部員たちが各地で指導したという。卒業した覚之助は中国に渡り教鞭を取っていたが29歳という若さで急逝。しかし、その名は日本サッカーの始祖として今も人々の記憶に刻まれている。

JR那智駅前にある顕彰碑。